

『論語集注』(朱熹撰)の日本語訳(為政第二)  
——『論語集注』を主とする朱子の『論語』解釈——

Japanese translation of “Lunyu Jizhu” (2)  
— Xi ZHU's Interpretation of “Confucian Analects” —

孫 路易  
SUN, Luyi

岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要  
第46号 2018年11月 抜刷  
Journal of Humanities and Social Sciences  
Okayama University Vol.46 2018

『論語集注』（朱熹撰）の日本語訳（為政第二）

―『論語集注』を主とする朱子の『論語』解釈―

孫 路易

周知の通り、朱熹（一一三〇―一二〇〇。朱子は尊称）の『論語』

解釈は、中国思想の発展に寄与しただけではなく、日本や朝鮮半島などの東アジアの思想の発展にも大きな影響を与えたものである。だが、『論語』には「道」「心」「徳」「君子」などの中国哲学の概念が随所に現れており、朱子哲学においてのそれらの概念の含意を明確に解明しない限り、朱子の『論語』解釈の全内容を理解することは極めて難しいと思われるのである。

筆者は、長年に渡って朱子哲学の研究に力を注ぎ、いままでは既に、一、「朱子の「太極」と「気」」（岡山大学『大学教育研究紀要』第七号、二〇一一年）

二、「朱子の「神」」（岡山大学『大学教育研究紀要』第八号、二〇一二年）

三、「朱子の「心」」（京都大学『中國思想史研究』第三十四號、二〇一三年）

四、「朱子の「理」」（岡山大学『大学教育研究紀要』第十号、二〇一四年）

五、「朱子の「情」」（岡山大学『大学教育研究紀要』第十一号、二〇一

五年）

六、「朱子の「変化気質」」（岡山大学大学院社会文化学科学研究科紀要』第四三号、二〇一七年）

七、「朱子の「君子」」（岡山大学大学院社会文化学科学研究科紀要』第四号、二〇一七年）

などの論文を発表した。その朱子哲学の研究を通じて、筆者は、上記の諸論文、及び『四書章句集注』（新編諸子集成、中華書局、一九八三年）と『朱子語類』（全八冊、宋・黎靖德編、王星賢点校、一九九四年）、特に『朱子語類』に所収の「論語（二～三十二）」（巻第十九～五十）に基づいての、『論語集注』を主とする朱子の『論語』解釈の現代日本語の完全翻訳を作成することが必要だと強く思うようになったのである。

本稿では、『論語集注』（前掲の『四書章句集注』に所収）の「為政第二」の朱子の集注を和訳することと、『論語』為政第二の原文を主に『朱子語類』に所収の「論語（一～三十二）」と『論語或問』に記録されている朱子の説明に基づいて和訳することを試みる。

「理」「道」「徳」「性」「敬」「君子」、これらの概念の具体的な内容

の要旨は本稿末尾に付録。

## 為政第二

全部で二十四章。

### 第一章

子曰、為政以德、譬如北辰、居其所而衆星共之。

孔子は言われた。「為政者は徳を持つている（つまり心に仁や孝の徳がある）のであれば、その徳を自ずと政（つまり人の正しくないところを正すこと）に現すものである。政は即ち徳とも言えるが、しかし徳は根本であり、先に徳があつてそれからその徳に基づいての政が現れるのであつて、民衆は為政者の徳に感化されてそこで自らそれを仰ぎそれに従うのである。これはあたかも、北辰（つまり天の枢軸、五つの星で構成されているが、その中の極星、つまり北極星）は回るがその場所を離れず、北の天空の星が北極星の周りを回転しているという自然現象のようなもの（つまり、為政者は自身の身が正しいのであれば、民衆は自然とそれを仰いで身を正しくするに努めてその身が正しくなるものだということ）である。」

集注：

「共」は、「拱」と発音する。また「拱」となっているテキストもあ

る。「政」は「正す」であり、人の正しくないところを正すことである。

「徳」は「得る」であり、得て心に収めて失わないことである。「北辰」は、北極のことであり、天の中枢である。「居其所（その所に居る）」とは、移動しないということである。「共」は、「向かう」であり、その意味は、大勢の星が（「北辰」の）周辺を回転しながらそれに向かつていくということである。「為政以德（政を為すに徳を以てす）」であれば、人を用いることがなくて天下（の民）がその君主に服従するのであり、その様子はそれと同じである。程子（前出）は言った。「政を為すに徳を以てして、それから人為を用いない。」范氏（前出）は言った。「政を為すに徳を以てす」であれば、特に何かの行動をしなくても（民が）感化され、特に何かの発言をしなくても（民に）信用され、人為を用いなくても（様々な事が）成し遂げられるのである。守るに当たっては極めて簡易な方法でも煩瑣な事情を制御することができるのであり、居るに当たってはじつとしていても動くものを統制することができるのであり、務めるに当たっては極めて少ない人数（つまり一人だけ）でも民衆を服従させることができるのである。」

〔前出〕は、「拙稿『論語集注』（朱熹撰）の日本語訳（學而第二）——『論語集注』を主とする朱子の『論語』解釈——」（岡山大学全学教育・学生支援機構教育研究紀要）第二号、二〇一七年）で既出の意。）

共、音拱、亦作拱。○政之為言正也、所以正人之不正也。徳之為言得也、得於心而不失也。北辰、北極、天之樞也。居其所、不動也。共、

向也、言衆星四面旋繞而歸向之也。為政以德、則無為而天下歸之、其象如此。○程子曰、為政以德、然後無為。范氏曰、為政以德、則不動而化、不言而信、無為而成。所守者至簡而能御煩、所處者至靜而能制動、所務者至寡而能服衆。

## 第二章

子曰、詩三百、一言以蔽之、曰思無邪。

孔子は言われた。「『詩経』に三百篇の詩が収められているが、(その内容の良いものは、読む人の善なる心を奮い起こし、善を勧めるに十分であり、その内容の悪いものは、読む人の羞惡の心を起こし、惡を戒めるに十分である。三百篇の詩は各々一つの「思无邪無し(思慮に邪まが無い)」、つまり、常に、思慮に虚偽がなく、善を好むことも惡を憎むことも皆正しく、そして内(思慮)と外(言行)を一致させる、ということであり、だから、その三百篇の詩の意味を)一言でまとめれば、(ただ読む人に)「思无邪無し」を求めただけだと言えるのだ。(これが『詩経』の教えの本意だ。)

集注：

「詩」(『詩経』)は、三百十一篇あり、「三百」というのは、大体の数を挙げるものである。「蔽」は、「蓋う」のような意味である。「思无邪(思无邪無し)」は、「(『詩経』の)魯頌・駉の篇の言葉である。

だいたい詩の言葉は、内容の良いものは人の善なる心を感じ奮することができ、内容の悪いものは人の放逸な心を戒めることができるものであり、詩の果たす役割はただ人に正しい思慮(つまり「性情」)を得させるだけである。しかしその詩文は繊細で婉曲であり、そして或いはそれぞれある特定な事に感觸されて発した言葉であり、詩についての総括的な意味を明示するものを求めようとすれば、これより明確で且つ(意味を)尽くしたものはない。だから、孔子は、詩は三百篇あるが、ただこの一言で充分にその意味を尽くすに足りると言ったのである。人々に示すその意義もまた切実である。程子(前出)が言った。

「思無邪」とは、誠のことである。范氏(前出)が言った。「学ぶ者は必ず要点を知ること努めなければならず、要点を知れば徳の実行は要を得ることができ(つまり「守約」)。「孟子」尽心下に「守りに約にして施し博き者は、善道なり。」とある)、徳の実行は要を得れば、(施し、つまりその実行により生じた影響力は)遍く及ぼすことができるのである(つまり「盡博」)。「(礼記)礼器に)「経礼三百、曲礼三千」とあるが、これもまた一言でまとめることができる。つまり、「(礼記)曲礼にいう)「毋不敬」(敬せざる毋かれ。つまり、思慮を正しくないことがないようにせよ、ということ)である。」

「(礼記)にいう)「毋不敬」は正心(つまり心を正しくする)、誠意(つまり意を誠にする)のことであり、『詩経』にいう「思无邪」は心正(つまり心が正しい)、意誠(つまり意が誠である)のことであり、と朱子は説明している。)

詩三百十一篇、言三百者、舉大數也。蔽、猶蓋也。思無邪、魯頌駒篇之辭。凡詩之言、善者可以感發人之善心、惡者可以懲創人之逸志、其用歸於使人得其情性之正而已。然其言微婉、且或各因一事而發、求其直指全體、則未有若此之明且盡者。故夫子言詩三百篇、而惟此一言足以盡蓋其義、其示人之意亦深切矣。○程子曰、思無邪者、誠也。范氏曰、學者必務知要、知要則能守約、守約則足以盡博矣。經禮三百、曲禮三千、亦可以一言以蔽之、曰毋不敬。

### 第三章

子曰、道之以政、齊之以刑、民免而無恥。道之以德、齊之以禮、有恥且格。

孔子は言われた。「今の為政者はその多くが覇者であって、民を治めるのに専ら政と刑を用い、徳と礼を用いない。」民を導くに政（つまり、法律や制度や禁令などの政治の道具）を用い（つまり、政治を行う為には先に法律や制度や禁令を設けて、民にそれらのもに從わせること）、民を齊しくするに刑（つまり、刑罰）を用い（つまり、法律や制度や禁令に悉く従うことをしなければ、刑罰を用いて悉く従うように齊しくすること）、民は（刑罰の威力を恐れて、一時的に目の前の刑罰を）避ける（つまり、一時的に罪を犯さないように気を付ける）のであるが、（不善を働く心は消えたわけではないから、不善を働くことに）羞恥を感じることはないのだ。民を導くに徳を用い（つまり、

必ず、為政者は自らその孝を尽くしてから民に孝を教えることができ、自らその悌を尽くしてから民に悌を教えることができる、こういう風に人々の善なる心を誘発して民を感化すること）、民を齊しくするに礼（つまり、「吉（祭祀）」「凶（喪葬）」「軍（軍旅）」「賓（賓客）」「嘉（冠婚）」の五礼）を用い（つまり、人の気質は人によってそれぞれ異なるが為に、その感化される度合いが人によって異なり、ばらつきが生じるのであり、そこで、礼を定規やコンパスのようなものとして用いてそのばらつきを無くして齊しくする、ということである。だが、齊しくすることに従わない者があれば、刑を廃止することはできない）、（そうすれば、民は不善を働くことを）恥じるだけではなく法律や制度や禁令も遵守するのである（つまり、善に至るということである）。」

集注…

「道」は、「導」と発音する（つまり第三声で発音する）。以下同じ。「道」は、「導く」のような意味であり、率先して行うということである。「政」は法律や制度や禁令を指す。「齊」は、民を齊しくすることである。導いても従わない者（があれば、それを）刑罰で齊しくするのである。「免而無恥（免れて恥無し）」とは、一時的に刑罰を避ける（つまり、罪を犯さないように気を付ける）のであるが、（悪事を働くことに）羞恥を感じることは全くない、ということである。思うに、敢えて悪事を働くことはしないものの、悪事をしようとする心はこれま

で消えたことがない。

「礼」は、制度や(官位や身分などの)等級を指す(「礼是五礼、所謂吉、凶、軍、賓、嘉」ともある)。「格」は、「至る」である。その意味は、(為政者が)自身の行いで民を率いれば、民は自然にそれを見て感じてそこで(感化されて学ぼうと)奮起するのであるが、人々の(その稟受した気が人によって)深かったり浅かったり厚かったり薄かったりして(それぞれ異なるが為に、その感化される度合いが)同じでないことについてはまた、礼でそのばらつきを無くせば、民は不善(を働くことに)恥を感じてそこで善に至るのだ、ということである。一説に、「格」は、「正す」であるという。『尚書』周書・冏命には「その非心を格す」(その正しくない心を正す)とある。私は思うに、「政」とは、(民を)治める道具のことである。「刑」とは、治めることを補助する方法のことである。「徳」と「礼」は法律や制度や禁令を制定するその根柢(つまり「根本」となるものであり、そして「徳」はまた「礼」の根本である。これらが互いに順次に関連していて、どちらの一方に偏ったりまたどちらの一方を廢したりすることではできないが、しかしながら「政」と「刑」はただ民に罪を犯させないことができるだけで、「徳」と「礼」の効果は、民を日に日に善良にさせているにも拘わらず民自身が(自分の日に日に善良になっていくことを)知らないのである(『孟子』尽心上「民日遷善而不知為之者。」)だから、民を治める者(つまり為政者)は、ただ末(つまり「政」と「刑」)だけを用いるということをしてはいけない。またその

本(つまり「徳」と「礼」)を深く探究しなければならないのだ。

道、音導、下同。○道、猶引導、謂先之也。政、謂法制禁令也。齊所以一之也。道之不從者、有刑以一之也。免而無恥、謂苟免刑罰、而無所羞愧。蓋雖不敢為惡、而為惡之心未嘗忘也。

禮、謂制度品節也。格、至也。言躬行以率之、則民固有所觀感而興起矣、而其淺深厚薄之不一者、又有禮以一之、則民恥於不善、而又有以至於善也。一説、格、正也。書曰、格其非心。○愚謂政者、為治之具。刑者、輔治之法。德禮則所以出治之本、而德又禮之本也。此其相為終始、雖不可以偏廢、然政刑能使民遠罪而已、德禮之效、則有以使民日遷善而不自知。故治民者不可徒恃其末、又當深探其本也。

#### 第四章

子曰、吾十有五而志于學、三十而立、四十而不惑、五十而知天命、六十而耳順、七十而從心所欲、不踰矩。

孔子は言われた。「私は、十五歳で学(つまり「格物」「致知」「誠意」「正心」「修身」「齊家」「治国」「平天下」の道理を追い求めること)に志し(心の向かうところがあることを「志」という。「学に志す」とはつまり、その心が専一に道理を追い求めることに注いでいき、自ら止めることができないということである)、三十歳になって立ち(「立」はつまり、足が既に地面に着いて動揺しないと)同じように心が

しつかりと定まって、外物がその心を動揺することができないということである）、四十歳になって惑わず（つまり、事物に従ってそれらの事物の道理を知っていて事に当たる時は迷わないということである。例えば、家の前に小川が横たわっているとすれば、その先ず小川に水があることを知るといふようなことである）、五十歳になって天命（つまり事物の道理のこのようになっていふその所以）を知り（つまり、あらゆる事物はもともと、同一の根源から出て来ているものということを知る）ことである。例えば、家の前に横たわっている小川にある水のその源を知るといふようなことである。具体的には、天の道が巡り流れて、万物に賦与するのであり、人間は天の道を性として受けているが、それは即ち仁義礼智である、こういうことを知ることである）、六十歳になって耳が従い（つまり、何かの事を聞くと、思慮をしなくてもその事の道理がすぐに分かる、これほど事物の道理を熟知しているということである）、七十歳になって心の思うままに言動しても「矩」（方形を書くかぎ型の定規、ここでは即ち道理）から外れることがない（つまり、心と道理が一つとなっているが故に、その心から発した言動が自ずと道理に合致し、道理に従うことを守ろうと意識しなくても自ずと固く守っているという状態である）。

集注：

古代では、十五歳になると、「大学」に入る（自十六七入大学、然後教之以理、如致知、格物及所以為忠信孝弟者）、つまり、十六、七

歳から大学に入り、先生が生徒に「理」を教える。例えば「致知」「格物」及び「忠」「信」「孝」「悌」といふようなもの。心の向かうところ、これを「志」と言う。ここでいう「学」とは即ち、「大学の道」（つまり、「大学」に論じている「格物」「致知」「誠意」「正心」「修身」「齊家」「治國」「平天下」の道理）である。これに志せば、心の向かうところは常にここにあり、「大学の道」を求めて飽きることがないのである。

そこで自ら「立つ」（つまり、外物がその心を動揺することができない）ことになれば、「守」ることが固い（つまり、心の向かうところが固く定められておれることがない）ものであり、「志」すことを意識しなくなるのである。

事物に備わっている当然の理について、不明なところがなければ、「知」ることが確かであり、「守」ることを意識しなくなるのである。

「天命」は即ち、天の道が巡り流れて、万物に賦与したものである。つまり事物の当然の理のこのようになっていふその所以である。これ（つまり「天命」を知れば、「知」ることが極めて精緻であり、「不惑」（つまり惑うことはない）はまた、言うまでもないのである。

人の話が（耳から）入って心に伝わり、違い逆らうところがなければ（つまり、思慮をしなくてもその話されている事物の道理がすぐに分かる、ということであれば）、「知」ることが究極に達したことになる、（即ち、『中庸』にいう）「思わずして得」（つまり、思慮をしなくても心得るといふこと）である。

「従」は、この字の通りの意味である。「従」は、「随う」である。「矩」は、規範を定める道具であり、方形を作る時に使われるものである。その心の思うままに随っても、自ずと規範を逸脱する（つまり道理から外れる）ことはない。（即ち、『中庸』にいう）「安んじて之を行う」「勉めずして中（あた）る」（つまり、「心が落ち着いて言動を行い」「道理に適っているかどうかを意識しなくてもその言動は道理から外れることはない」ということ）である。程子（前出）は言った。「孔子は生まれながら道理を知っている人である。それなのに学に志したことによってそうなったと言うのは、後世の人々を励まし前進させるためである。「立」とは、自ずとこの道にしっかりと立つ（つまり道理から外れることはない）ことである。「惑わず」は、疑うことがないということである。「天命を知る」とは、「窮理尽性」（つまり事物の当然の理のこのようになっていゝるその所以を窮め尽くすこと）である。「耳が順う」とは、聞いた事については皆その事の道理がすぐに分かるということである。「心の欲する所に従つて、矩を踰えず」とは、「勉めずして中る」（つまり、道理に適っているかどうかを意識しなくても自ずと道理から外れることはないということ）である。また言った。「孔子が自ら成長過程の段階をこのように語つたのは、聖人が必ずしもそうだったわけではなく、ただ学ぶ者のために（成長の）諸段階を設けただけであり、（即ち、『孟子』尽心上にいう）「科に盈ちて後進む」「章に成りて後達する」のことである（つまり、水は窪みに満たしてから前に進むというように、学ぶことも徐々に前進するものであり、

「知」は積み重ねが厚くなって形が形成されてから達成するというように、道理を知ることとも知識の積み重ねがあつてから究極に至るものである。』胡氏（前出）は言った。「聖人の教え方は多様だが、しかしその要点は、ただ人にその本来の心を失わせないだけである（『孟子』告子上「此之謂失其本心」。その心（つまり本心）を得ようとする人は、聖人が示した学に志して、その順序に従つて進むしかないのだ。僅かな欠点もなく、全ての理を明らかにし尽くした後には、日常の生活の中で、その心がさらさらと光っていて（つまり本心に覆つて濁りがなくなつて）、「意欲」（ここでは、つまり心の思うまま）に従つて（言動しても）、「至理」でないものはない（つまりその言動はすべて理に合致する）のである。思うに、「心」は体（つまり本体）で、「欲」は用（つまり作用、働き）であり、体は「道」（つまり理）で、用は「義」（つまり理の現れ）であり、（即ち、『史記』夏禹本記にいう）「声は律と為り、身は度と為る」（つまり、禹の、声は音韻に合い、身の振る舞いは規範に合致するということ）である。』また言った。「聖人がこのことを述べたのは、一つには、学ぶ者に「優遊涵泳」（ゆっくりと水にたつぷり浸つて泳ぐ）すべきであり（つまり、じっくり時間をかけて学ぶべきということ）、段階を踏まずに飛ばして進んではいけないことを示し（『礼記』学記「學不躡等也。」）、二つには、学ぶ者に（『詩』周頌・閔予小子之什・敬之にいう）「日就月將」（つまり毎日毎月目標に近づく）べきであり（つまり日に日に前進すべきということ）、「半途而廢」（『中庸』「半途而廢」、つまり怠けて前進しない）ということ



をしてはいけないことを示しているのである。」私が思うに、聖人は「生知安行」（『中庸』「或生而知之」「或安而行之」、つまり、生まれながら理を知り、自ずとたやすく仁を行う）人であり、当然積み重ねの段階的な過程を経ることはないが、しかしその心には既にこの境地に達したと思ったことはなかったのだ。これは、その日常の生活の中で、きつと自分がその進歩していることを感じていたが、他の人は（そのことを）知ることができなかった、ということである。だから、そのそれ（つまり成長過程の段階）に近いことを言葉で表現して、学ぶ者がこれを手本と見て自ら励む、ということを望んだのである。心の中では自分のことを聖人だと思っているが、とりあえず自分は優れた人間ではないことを述べておいた、こういうことではないのだ。以下では、孔子が謙虚な表現で表すものは、意味は皆これと同じ。

古者十五而入大學。心之所之謂之志。此所謂學、即大學之道也。志乎此、則念念在此而為之不厭矣。

有以自立、則守之固而無所事志矣。

於事物之所當然、皆無所疑、則知之明而無所事守矣。

天命、即天道之流行而賦於物者、乃事物所以當然之故也。知此則知極其精、而不惑又不足言矣。

聲入心通、無所違逆、知之之至、不思而得也。

從、如字。○從、隨也。矩、法度之器、所以為方者也。隨其心之所欲、而自不過於法度、安而行之、不勉而中也。○程子曰、孔子生而知

之也、言亦由學而至、所以勉進後人也。立、能自立於斯道也。不惑、則無所疑矣。知天命、窮理盡性也。耳順、所聞皆通也。從心所欲、不踰矩、則不勉而中矣。又曰、孔子自言其進德之序如此者、聖人未然、但為學者立法、使之盈科而後進、成章而後達耳。胡氏曰、聖人之教亦多術、然其要使人不失其本心而已。欲得此心者、惟志乎聖人所示之學、循其序而進焉、至於一疵不存、萬理明盡之後、則其日用之間、本心瑩然、隨所意欲、莫非至理。蓋心即體、欲即用、體即道、用即義、聲為律而身為度矣。又曰、聖人言此、一以示學者當優游涵泳、不可躐等而進。二以示學者當日就月將、不可半途而廢也。愚謂聖人人生知安行、固無積累之漸、然其心未嘗自謂已至此也。是其日用之間、必有獨覺其進而人不及知者。故因其近似以自名、欲學者以是為則而自勉、非心實自聖而姑為是退託也。後凡言謙辭之屬、意皆放此。

## 第五章

孟懿子問孝。子曰、無違。樊遲御、子告之曰、孟孫問孝於我、我對曰無違。樊遲曰、何謂也。子曰、生、事之以禮。死、葬之以禮、祭之以禮。

（魯國の大夫の）孟懿子は孝のことをお尋ねした。孔子は答えられた。「違わないことだ（つまり、礼に違わないこと、即ち理に背かないこと）。（つまり、為すべきことではないのに為す、または為すべきことなのに為さない、これはどれも不孝である。諸侯は諸侯の礼をもつ

てその親に仕え、大夫は大夫の礼をもってその親に仕えるのが為すべきことであるが、当時、魯国の家老の、孟孫氏・叔孫氏・季孫氏の三家が礼を僭越し、(礼に) 違うことを行っていた。そこで、含みのある言い方で答えたのである。(後に、) 樊遲は孔子に馬車を御することになった。孔子が彼に話された。「孟孫さん(つまり孟懿子)が私に孝のことを聞いたから、私は「違わないことだ。」と答えた。」樊遲が言った。「(それは) どういう意味ですか。」孔子は言われた。「(つまり、親が) 生きている間は、礼をもって仕え、(親が) 亡くなった後は、礼をもって埋葬し、礼をもって祭る、ということだ。」

集注・

孟懿子は、魯国の大夫で仲孫氏であり、名は何忌である。「違わないことだ」は、理に背かないことを言う。

樊遲は、孔子の弟子であり、名は須。「御」は、孔子の為に馬車を御することである。孟孫は、即ち仲孫である。孔子は、孟懿子は「違わないことだ」という答えの) 意味がよく分かっていないのに(更に) 質問することをしなかったから、「違わないことだ」という答えの) 意味を誤解して、父親の命令に従うことを孝としたかもしれないと思つて、そこで、樊遲に(その自分と孟懿子の対話を) 告げて「違わないことだ」という答えの意味を明確に説明したのである。

生きている時は仕え、死んだら祭るということは、親に仕えることの始めと終わりを全うするものである。「礼」は、即ち理の外面上には

どよく表れたものである。人は、親に仕えることは最初から最後まで専ら礼をもって(仕えて) いい加減なことをしないのであれば、その親を尊ぶことはこれ以上のものはないのである。当時は三家(孟孫と季孫と叔孫) が僭越して礼(の儀式) を行っていた。だから、孔子は、「違わないことだ」と言つて戒めたのである。だが、言葉の意味は明確でなく、また専ら三家に向かつて言つたようなものでもない、というところが、聖人の言葉と言えるのである。胡氏(前出) が言った。「人はその親に対して孝行をしようと思つ場合、心(つまり思い) は限りが無いものであるが、分(つまり身分) は限りがあるものである。身分に合う礼をもって孝を行つことができるのにそれを行わないのと、身分に合わない礼をもって孝を行つてはいけないのにそれを行うのは、どれも孝ではない。「以禮(礼を以てす)」とは、その身分に合う礼をもって孝を行ふべき、ただこれだけのことだ。」

孟懿子、魯大夫仲孫氏、名何忌。無違、謂不背於理。

樊遲、孔子弟子、名須。御、為孔子御車也。孟孫、即仲孫也。夫子以懿子未達而不能問、恐其失指、而以從親之令為孝、故語樊遲以發之。生事葬祭、事親之始終具矣。禮、即理之節文也。人之事親、自始至終、一於禮而不苟、其尊親也至矣。是時三家僭禮、故夫子以是警之、然語意渾然、又若不專為三家發者、所以為聖人之言也。○胡氏曰、人之欲孝其親、心雖無窮、而分則有限。得為而不為、與不得為而為之、均於不孝。所謂以禮者、為其所得為者而已矣。

## 第六章

孟武伯問孝。子曰、父母唯其疾之憂。

武伯（孟懿子の子供）は孝のことをお尋ねした。孔子は答えられた。

「もし自分の体を大事にすることを知らなければならない、きつと自分の親を大事にしなければならない、という理由も知るのである。だから、父母はただその子供の病気になることだけを心配するのだ。（つまり、子供が自分の親のその気持ちを感じて、親に心配をかけないように自分の体を大事にするのであれば、親孝行と言え、ということである。）」

集注：

武伯は、孟懿子の子供で、名は屍である。その意味は、父母が子供を愛する心は、至らないところはなく、特にその子供が病気になることを恐れて、いつも心配している、ということである。子供が、父母の心配事を察して、父母の心（つまり気持ち）をよく理解し（父母の心配事を）自分の心配事とすれば、その体（の健康）を守る本人としては、当然慎まないことを許さないのであり、どうして孝とすることができないのだろうか。旧説では、「子供は、自分が不義に陥る（つまり自分の行いが理に背く）ことを父母に心配させることなく、ただ自分が病気になることだけを（父母に）心配させるのであれば、そこで孝と言えるのだ。」という（何晏『論語集解』に引く馬融の注）。（こ

の解釈も）また通じるのである。

武伯、懿子之子、名屍。言父母愛子之心、無所不至、惟恐其有疾病、常以為憂也。人子體此、而以父母之心為心、則凡所以守其身者、自不容於不謹矣、豈不可以為孝乎。舊説、人子能使父母不以其陷於不義為憂、而獨以其疾為憂、乃可謂孝。亦通。

## 第七章

子游問孝。子曰、今之孝者、是謂能養。至於犬馬、皆能有養。不敬、何以別乎。

子游は孝についてお尋ねした。孔子は答えられた。「いまの人々のいう孝は、父母に飲食を供給することができるという意味だ。（家畜の）犬や馬も、皆（一人に）飲食を供給してもらっている。「不敬」（つまり、事に当たって、思慮を集中せず軽んじたり怠ったりすること）であれば、（家畜の犬や馬に飲食を供給すること）、何の違いがあるか。」

集注：

「養」は、去声（つまり第四声）である。「別」は、「彼」「列」の反。子游は、孔子の弟子であり、姓は言、名は偃。「養」は、飲食の供給を言うのである。（家畜の）犬や馬は人の供給によって飲食するのであり、それも「養」と同じのようなものである。その意味は、人が犬

や馬を家畜し、その犬や馬が皆それで養われているのであり、父母に飲食を供給することができるものの、「敬」（小心畏謹、便是敬）、つまり事にあたって、思慮を集中して軽んじたり怠ったりすることはしないこと）でなければ、（家畜の）犬や馬に飲食を供給することとどうして違うのだろうか、ということである。「不敬」の罪を厳しく言うことで、子游を深く戒めたのである。胡氏（前出）が言った。「世俗での親に仕えるのは、養うことができれば十分である。親からの恩愛に對してなれて軽んじたり甘えたりして、知らず知らずに「不敬」になってしまふのであれば、小さな過ちではないのだ。子游は孔子門下の高弟であり、「不敬」になつたわけではないが、聖人は、ただ（子游は、愛は十分過ぎるが、敬は足りない、という人柄だから、）その愛が敬を超えることを心配して、そこで、その言葉で子游を深く戒め啓発したのである。」

養、去聲。別、彼列反。○子游、孔子弟子、姓言、名偃。養、謂飲食供奉也。犬馬待人而食、亦若養然。言人畜犬馬、皆能有以養之、若能養其親而敬不至、則與養犬馬者何異。甚言不敬之罪、所以深警之也。○胡氏曰、世俗事親、能養足矣。狎恩恃愛、而不知其漸流於不敬、則非小失也。子游聖門高弟、未必至此、聖人直恐其愛踰於敬、故以是深警發之也。

## 第八章

子夏問孝。子曰、色難。有事弟子服其勞、有酒食先生饌、曾是以為孝乎。

子夏は孝についてお尋ねした。孔子は答えられた。「色（つまり楽しい顔つきと温順な表情が現れること）が難しい。仕事があれば年少者がその労力を費やし、お酒とご飯があれば父と兄に飲食を譲る、こういうことでは、以前は孝としていたのだろうか。（つまり、労力を費やすことと飲食を譲ることだけでは、孝とするにはまだ十分ではないのだ）」。

集注・

「食」は、「嗣」と発音する。「色難」は、親に仕える時には、ただ色（愉色婉容）、つまり楽しい顔つきと温順な表情が現れること）が難しい、ということである。「食」は、ご飯のことである。「先生」は、父親と兄のことである。「饌」は、飲食させることである。「曾」は、「嘗て」のような意味である。思うに、「孝子の深い愛を持っている人には、必ず和氣があり、和氣がある人には、必ず楽しい顔つきが現れる。楽しい顔つきが現れる人には、必ず温順な表情が出る。」（『礼記』祭儀「孝子之有深愛者、必有和氣、有和氣者、必有愉色、有愉色者、必有婉容。」）だから、親に仕える時には、特に「色」（つまり楽しい顔つきと温順な表情が現れること）が難しいとするので、労力を費やすことと飲食を供給することでは、孝とするにはまだ十分ではないのだ。旧説では、

「父母の顔色を見てそれに従うことが難しいとする。」(『論語集解』に引く包咸の注)というが、これも通じるのである。程子が言った。「(第五章の)孟懿子に告げたのは、衆人に告げるものである。(第六章の)孟武伯に告げたのは、孟武伯には心配事が多いからだ。子游は、(愛は十分過ぎるが、敬は足りない、こういう人柄だから、) (親を) 養うことができても敬を失い、子夏は、(敬は十分過ぎるが、愛は足りない、こういう人柄だから)「直義」(「只是於事親時無甚回互處」、つまりただ親に仕える時にはひどく婉曲なところがないこと)ができて、もしかしたら穏やかで優しい顔つきや表情が少なかったかもしれない。各質問者の資質の高下と、各質問者の欠点に応じて告げたのであり、だから(その内容はそれぞれ)異なるのである。」

食、音嗣。○色難、謂事親之際、惟色為難也。食、飯也。先生、父兄也。饜、飲食之也。曾、猶嘗也。蓋孝子之有深愛者、必有和氣、有和氣者、必有愉色、有愉色者、必有婉容。故事親之際、惟色為難耳、服勞奉養未足為孝也。舊說、承順父母之色為難、亦通。○程子曰、告懿子、告衆人者也。告武伯者、以其人多可憂之事。子游能養而或失於敬、子夏能直義而或少溫潤之色。各因其材之高下、與其所失而告之、故不同也。

## 第九章

子曰、吾與回言終日、不違如愚。退而省其私、亦足以發。回也不愚。

孔子は言われた。「わしは一日中顔回と話しても、(彼は) 質問も反論もせず何でも聞き入れて愚か(「不通曉底人」、つまり物事によく通じない人)のようだった。その場を離れてから家でくつろいだり一人て居たりしている時の顔回の様子を観察すると、やはり(私の教えを)十分に実践しているのだ。顔回は愚か(つまり物事によく通じない人)ではないのだ。」

(「顔回は、聖人に比べて九分九厘が備わっていてたったの一厘の差があるだけであり、孔子の話を深く理解し得ていたので、質問をしなかつたのだ」と、朱子は説明している。)

集注…

「回」は、孔子の弟子であり、姓は顔、字は子淵。「不違」とは、(話し手と聞き手との) 考えが互いに背かず、(話し手の話を聞き手はすべて) 聞き入れて質問や反論をしない、ということである。「私」は、家でくつろいだり一人で居たりしている時のことであり、孔子に会って教えを請う時のことではない、という意味である。「発」は、(孔子の) 述べた道理を「発明」する(「然燕私之際、尤見顔子踐履之実處」、つまり実際に実践している)ことを言うのである。私がこのことについて(師に) 尋ねたところ、師の李侗(二〇九三〜一一六三)、字は愿中、号は延平)は答えられた。「顔子は、(素質は)「深潜」(「深厚不浅露」、つまり繊細) 且つ純粹で、聖人に比べて九分九厘が備わっていてたったの一厘の差があるだけである。彼は孔子の言葉を聞くと、

黙って胸中で理解して「心融」し（「須是融化、查滓便下去」、つまり、理の顕現を邪魔する私意（査滓）が除去され）、心の感触が瞭然であり、当然（孔子の述べた）一つ一つの道理をすべて理解し得ていたのである。だから、一日中話しても、ただ彼は質問も反論もせず何でも聞き入れている愚人のように見えただけである。孔子が、その場を離れてから、家でくつろいだり一人で居たりしている時のその顔回の様子を観察し、その日常生活の中の言動や立ち居振る舞いは、皆孔子の教えを十分に実践しているのであり、泰然として孔子の教えを遵守して疑わなかった、こういうことを見て、そこで顔回は愚人（つまり物事によく通じない人）ではないと分かったのである。」

回、孔子弟子、姓顔、字子淵。不違者、意不相背、有聽受而無問難也。私、謂燕居獨處、非進見請問之時。發、謂發明所言之理。愚聞之師曰、顔子深潛純粹、其於聖人體段已具。其聞夫子之言、默識心融、觸處洞然、自有條理。故終日言、但見其不違如愚而已。及退省其私、則見其日用動靜語默之間、皆足以發明夫子之道、坦然由之而無疑、然後知其不愚也。

## 第十章

子曰、視其所以、觀其所由、察其所安。人焉廋哉、人焉廋哉。

孔子は言われた。「（人の）その目に見える具体的な行為（が善であ

るどうか）を見、（それから）なぜその行為を行ったのか、その理由を観察し、（それから更に）その行為を行うのはその人の普段の身につけた習性によるものかどうかを見極める。（このようにすれば、隠そうとしても、）どうして隠しきれぬのだろうか、どうして隠しきれぬのだろうか。」

（朱子哲学では、「循理」（つまり理に従うこと）は即ち「仁」で、「仁」は即ち「善」であり、これに対して「背理」（つまり理に背くこと）は即ち「不仁」で、「不仁」は即ち「悪」である、とされている。だから、朱子のいう「善人」は即ち常に理に従って言動を行う人のことであり、朱子のいう「君子」である。）

集注…

「以」は、「為す」である。善を為す人は君子であり、悪を為す人は小人である。

「観」は、「見る」より詳しく見ること（つまり観察すること）である。「由」は、「従う」である。（その為す）事は善であっても、「意」（何かをしようとするもの、つまり意欲・動機）には善でないものがあれば、「君子」と言えないのだ。ある人は言った。「由」は、行うことである。その行為を行う所以のものを言うのである。」

「察」は、つまり更に詳しく加えること（つまり見極めること）である。「安」は、心の楽しむところである（『集注』では「安、所樂也」であるが、『朱子語類』には「集注下得樂字不穩。安、大率是他

平日存主習熟處」とある。ここの「存主習熟」はつまり習性。「意」(つまり意欲・動機)は善であっても、心の楽しむところが善になれば、(その善の「意」も)ただの偽りであり、どうして長く続いて変わらないことがあるのか。

「焉」は、「於」(「處」)の反。「廋」は、「所」(「留」)の反。「焉」は、「何」(つまり「どうして」だろうか)である。「廋」は、「匿」(つまり隠すこと)である。同じ語を二度繰り返し述べてこのことを深く明らかにするのである。程子は言った。「人は自分で「知言窮理」(つまり、すべての言葉においてその道理を窮め尽くす)ことができれば、これによって聖人のように人を見極めることができるのだ。」

以、為也。為善者為君子、為惡者為小人。

觀、比視為詳矣。由、從也。事雖為善、而意之所從來者有未善焉、則亦不得為君子矣。或曰、由、行也。謂所以行其所為者也。

察、則又加詳矣。安、所樂也。所由雖善、而心之所樂者不在於是、則亦偽耳、豈能久而不變哉。

焉、於處反。廋、所留反。○焉、何也。廋、匿也。重言以深明之。

○程子曰、在己者能知言窮理、則能以此察人如聖人也。

## 第十一章

子曰、溫故而知新、可以為師矣。

孔子は言われた。「読んだ書物を繰り返し読んで書に書かれている道理を以前の理解より一層精確に理解し得る人は、(道理を習熟していつてあらゆる学び者の要求に対応できるので)、教師になる資格があるのだ。」

集注：

「温」は、「尋繹」(つまり繰り返し返し習うこと)である。「故」とは、「舊所聞」(昔の聞いたこと)であるが、「温故書而知新義」とあり、つまり以前に書物を通して知ったこと)である。「新」とは、今の得たものである。その意味は、学びにおいて以前に読んだ書物を繰り返し読み、その都度新たに得るものがあれば、(その)学んだものは身につけていて、限りなく応用できるのであり、だから、人の師になれる、ということである。「記問之學」(『礼記』学記「記問之學、不足以為人師」。これについて朱子は「記得一事、更推第二事不去、記得九事、便說十事不出。」「記得十件、只是十件。記得百件、只是百件。」と説明している。つまり書物に書かれた事を覚えるだけで応用ができない、こういう「学び方」であれば、心に会得するものがなく、知ることに限界があるのである(雖是千卷万卷、只是千卷万卷、未有不窮)、つまり千卷万卷の書物を読んでも、ただ千卷万卷を読んだだけで、限りが無いものではない)。だから、『礼記』の「学記」には、そういう人を咎めて「以て人の師と成るに足らず」という。まさにこの章の意味と互に通じるものである。

温、尋繹也。故者、舊所聞。新者、今所得。言學能時習舊聞、而每有新得、則所學在我、而其應不窮、故可以為人師。若夫記問之學、則無得於心、而所知有限、故學記譏其不足以為人師、正與此意互相發也。

## 第十二章

子曰、君子不器。

孔子は言われた。「君子（徳の実行を行う人、つまりあらゆる事に当たってすべて理に従って対応する人）は、一つの才能や一つ技芸だけに徳の実行を行うことはしない。」

集注：

「器」とは、それぞれその使い道に適しているものの、互いに通用することができない、こういう物である。「成徳之士」（つまり徳の実行を行う人）は、「体」（君子者、才徳出衆之名。徳者、體也。才者、用也）、ここの「体」はつまり仁義礼智の徳）はすべて身に備わっていて、だから、「用」（つまりその徳の実行）は、あらゆる事に当たって行われるものであって、特に一つの才能や一つの技芸に行われるものではないのだ。

器者、各適其用而不能相通、成徳之士、體無不具、故用無不周、非特為一才一藝而已。

## 第十三章

子貢問君子。子曰、先行其言、而後從之。

子貢は君子のことをお尋ねした。孔子は答えられた。「まず行為を行い、後に行ったことを言うのだ。」

（「只為子貢多言、故告之如此」と朱子は説明している。つまり子貢は口数の多い人であるが為に、そこで孔子がこのように告げたのである。）

集注：

周氏（周孚先、程子の弟子）は言った。「先ず其の言を行う」とは、行為は（この行為を行うのを）言う前に行うということであり、「而かる後に之に従う」とは、言うことは（その行為を）既に行った後にするということである。」范氏（前出）は言った。「子貢について心配するのは、言うのが難しいのではなく、行うのが難しいということであり、そこで、子貢にこのことを告げたのである。」

周氏曰、先行其言者、行之於未言之前、而後從之者、言之於既行之後。○范氏曰、子貢之患、非言之艱而行之艱、故告之以此。

## 第十四章

子曰、君子周而不比、小人比而不周。



孔子は言われた。「君子は、人と付き合うにおいて（親しくすべき人を親しくし、遠ざけるべき人を遠ざけるような）ただ理に従って行うだけであって（自分と気が合う人が好き、自分と気が合わない人を憎むような）偏った私的な心情で人と付き合うことはしない。（これに対して）小人は偏った私的な心情で人と付き合うのであって理に従って人を扱うことはしない。」

集注：

「周」は、遍く行き届いて偏らないことである（自家只看理、無輕重厚薄、便是周遍）、つまり理に適うこと。「比」は、偏って仲間意識を持つことである。「周」と「比」は、どれも親しく懇ろな心をもって人と付き合うという意味であるが、ただ「周」は公であるが、「比」は私である、この点は違うのである。君子と小人の行いが異なることは、陰と陽、昼と夜、のようなもので、何もかもが相反するものである。しかしその違いを考究すると、公と私のどちらを重んじるかにあり、ほんの僅かな差に過ぎないのだ。だから、聖人は、「周」と「比」、「和」と「同」、「驕」と「泰」の類のものについては、よく対として挙げて比べて言うのであり、（これは）学ぶ者に、両者の違いを察して、「審其取舍之幾」（「覺得思慮失了、便着去事上看、便舍彼取此。須着如此、方得」、つまり具体的な事の内容を審らかにしてから取舍を行うこと）をさせようとした為である。

周、普也。比、偏黨也。皆與人親厚之意、但周公而比私耳。○君子小人所為不同、如陰陽晝夜、每每相反。然究其所以分、則在公私之際、毫釐之差耳。故聖人於周比、和同、驕泰之屬、常對舉而互言之、欲學者察乎兩間、而審其取舍之幾也。

## 第十五章

子曰、學而不思則罔、思而不學則殆。

孔子は言われた。「学んで（つまり、まだ知らないことを知ろうとすること、まだできないことをできるようにすることを行うだけで）、（静かに坐ってゆっくりその学んだことの中の道理を精細に）思索しなければ（会得するものがなくて道理に）暗いのであり、思索して（つまり、具体的な学び事からかけはなれて、ただ目を閉じて静かに思慮を巡らすだけで）、（具体的な事を）学ばなければ（ただのでたためであって）必ず心に不安を抱くのだ。」

集注：

この事を学んでいるのにこの事の道理を思索しない、だから道理に暗くて会得するものがないのだ。その学んでいる事を習熟しない、だから「危」（「便不熟、臬兀不安」、つまり動揺して）不安を感じるのだ。程子（前出）は言った。「『中庸』にいう「博く学び、審らかに問い、慎しみて思い、明らかに弁じ、篤く行う」の五つのことは、一つでも

やめれば、学びとは言えないのだ。」

不求諸心、故昏而無得。不習其事、故危而不安。○程子曰、博學、審問、慎思、明辨、篤行五者、廢其一、非學也。

## 第十六章

子曰、攻乎異端、斯害也已。

孔子は言われた。「天下にはただこの一つの道理しかない。人の心が正しくないが故に、そこで邪説に流れてしまうのだ。邪に流れてしまうと、必ず正を害する。だから、異端を講じたり習ったりすることは、ただ害があるだけだ。」

集注…

范氏（前出）は言った。「攻」は、専ら治めることであり、だから木・石・金・玉の加工を行う（つまり治める）ことを「攻」と言う。「異端」は、聖人の道ではなく、別に一派を為すものであり、例えば「楊墨」（つまり楊朱と墨子）はそれである。彼らは大衆を父や君主を軽視するまでに導いき（『孟子』滕文公下「楊氏為我、は無君也。墨氏兼愛、是无父也。無父無君、是禽獸也。」）、そればかり講習して（攻者、是講習之謂）ともある）理論の精度を上げようとしたので、その害を為すことは甚だしい。」程子（前出）は言った。「仏教の理論は、

楊朱と墨子（の説）に比べれば、最も理に近いものであって、だからその害を為すこともまた最も甚だしい。学ぶ者は、（仏教を）淫らな音楽や（妖艶の）美貌のようなものと見て遠ざけるべきであり、さもなければ、次第にそれに溺れてしまうのである。」

范氏曰、攻、專治也、故治木石金玉之工曰攻。異端、非聖人之道、而別為一端、如楊墨是也。其率天下至於無父無君、專治而欲精之、為害甚矣。○程子曰、佛氏之言、比之楊墨、尤為近理、所以其害為尤甚。學者當如淫聲美色以遠之、不爾、則駸駸然入於其中矣。

## 第十七章

子曰、由、誨女知之乎。知之為知之、不知為不知、是知也。

孔子は言われた。「由よ、（君には荒っぽいところがあって、事がある度に「分かる」と言って事を精察しようとしなさい。だから）、君に「知る」とはどういうことを教えよう。知っていることを知るとし、まだ知っていないことを知らないとする。（自らを欺くことはしない、だから、）これこそ「知る」ということだ。」

集注…

「女」は、「汝」と発音する。「由」は、孔子の弟子であり、姓は仲、字は子路。子路は、勇敢な行為を好んでする人で、思うに、（彼は）

その知らないことを強いて知っていると聞いたことがあり、そこで、孔子が彼に、「私は、君に知ることとはどういうことかを教えよう。ただ、知っていることであれば知るとし、知っていないことであれば知らないとする、これだけだ。」と告げられたのである。このようであれば、悉く知り尽くすことができなくても、自分を欺く弊害がないので、知るとすることには問題がないのである。いうまでもなく、孔子のこの教えに基づいて「求之」（「若不説求其知一著、則是使人安於其所不知」、つまり、まだ知っていないことを知ろうと努めること）であれば、また知ることができる理もあるのだ。

女、音汝。○由、孔子弟子、姓仲、字子路。子路好勇、蓋有強其所不知以為知者、故夫子告之曰、我教女以知之之道乎。但所知者則以為知、所不知者則以為不知。如此則雖或不能盡知、而無自欺之蔽、亦不害其為知矣。況由此而求之、又有可知之理乎。

## 第十八章

子張學干祿。子曰、多聞闕疑、慎言其餘、則寡尤。多見闕殆、慎行其餘、則寡悔。言寡尤、行寡悔、祿在其中矣。

子張は俸祿を求めることを（孔子に）学ぼうとした。孔子は言われた。「（もし多く人の話を聞くこと（読書を含む）をしなければ疑問に思うこともないのだが、）多く聞くことは（つまり多くの言論を比較する

ことにより）疑問を取り除いて、（自分の発言に不穩がないように）その発言を慎めば、過ちが少ないのだ。（もし多く人の行いを見ること（読書を含む）をしなければ不安に思うこともないのだが、）多く見ることは（つまり多くの人の行いを参考することにより）不安を解消して、（自分の心に不安がないように）その行動を慎めば、後悔が少ないものだ。発言に過ちが少なく、行動に後悔がすくないのであれば、俸祿は自ずと得られるのだ。」

〔徳の実行を既に行い、名声が既に広まったのであれば、自ずと人から出仕を求めて来るので、俸祿は求めなくても自ずと得られるのだ。〕と朱子は説明している。）

集注…

子張は、孔子の弟子であり、姓は顓孫、名は師。「干」は、「求める」である。「祿」は、仕える者の報酬である。

「行寡」の「行」は、去声（つまり第四声）である。呂氏（呂大臨、字は與叔。程子の弟子）が言った。「疑」とは、まだ信じないということであり、「殆」とは、まだ心に不安があるということである。「程子（前出）が言った。「尤」は、過ちは人を傷つけることを見て知るものである（「出言或至傷人、故に多尤」、つまり自分の言論が他人を傷つけるかも知れない、だから過ちが多い）。「悔」は、自分の行いに至らぬところがあることを自分が先に知るものである（「行有不至、己必先覺、故多悔」、つまり行いに至らぬところがあれば、必ず自分

が先に分かる、だから後悔が多い)。私が思うには、見聞が多いことは広く学ぶことであり、疑問や不安を除くことは精細に善を選ぶことであり、発言や行動を慎むことは理に従うことである(「學之博」「擇之精」「守之約」については、『論語』雍也「君子博學於文、約之以禮。」「中庸」「誠之者、擇善而固執之者也。」「孟子」公孫丑上「又不如曾子之守約」(集注「又不如曾子之反身循理、所守尤得其要也。」)。だいたい「在其中(その中にある)」という語はどれも「求めることをしなくても自然に得られる」という意味である(『論語』に「餒在其中」「直在其中」などの語がある)。子張にこれを告げてその過ちを正して前進するように励ましたのである。程子は言った。「身を修めれば爵位が得られるのであって(『孟子』告子上「仁義忠信、樂善不倦、此天爵也。公卿大夫、此人爵也。」、君子は言行をよく慎めば、俸禄が得られるのだ。子張は俸禄を求める方法を学ぼうとしたので、そこで、このことを彼に教えて、その心を安定させて利益や俸禄に心が動かされないようにしたのである。もし顔回(第九章に既出)と閔子騫(名は損、字は子騫)ならばこのような質問をしないはずである。このようにしても俸禄を得られない者がいるのではないかと疑う人もいるが、孔子は「耕すや、餒其の中にあり」(『論語』衛靈公)ともおっしゃっているのだから、ただ道理として行うべきことを行うほかないのだ。」

子張、孔子弟子、姓顓孫、名師。干、求也。祿、仕者之奉也。行寡之行、去聲。○呂氏曰、疑者所未信、殆者所未安。程子曰、尤、

罪自外至者也。悔、理自内出者也。愚謂多聞見者學之博、闕疑殆者擇之精、慎言行者守之約。凡言在其中者、皆不求而自至之辭、言此以救子張之失而進之也。○程子曰、修天爵則人爵至、君子言行能謹、得祿之道也。子張學干祿、故告之以此、使定其心而不為利祿動。若顔回則無此問矣。或疑如此亦有不得祿者、孔子蓋曰耕也餒在其中、惟理可為者為之而已矣。

## 第十九章

哀公問曰、何為則民服。孔子對曰、舉直錯諸枉、則民服。舉枉錯諸直、則民不服。

哀公がお尋ねになった。「どうすれば民衆が服従するだろうか。」(哀公は時々ただ民衆が恐れて自分に服従することを求めていたので)孔子は答えられた。「直(賢人)、つまり才能があり言動が理に適う人)を起用し、多くの枉(「不肖」、つまり才能がなく言動が理に背く人)を登用しない、そうすれば道理に適っているので、民衆は服従するのです。不肖を起用し、多くの賢人を登用しないのであれば、民衆は服従しないのです。」

集注…

「哀公」は、魯国の君主であり、名は蔣。だいたい、君主の質問に対して孔子が答えることを、(「子曰」ではなく、)皆「孔子對曰」と

書くのは、君主を尊ぶということである。「錯」は、「捨置」(登用しないこと)である。「諸」は、「衆」(多いということ)である。程子(前出)が言った。「起用することと登用しないことが道義に適っているのであれば、人心は服従するのである。」謝氏(前出)が言った。「直(賢人)が好き枉(不肖)が嫌いの、人間の最も根本的な性質である(蓋好賢而悪不肖、乃人之正性)、つまり賢人を好み不肖を憎むことは、人間の本性である。(人間の本性に)従えば(人心が)服従し、逆らえば(人心が)離れるのは、当たり前前の道理である。しかし無道(の時代の出来事)をもってこの孔子の言葉に照合してみると、賢人を不肖とし、不肖を賢人とする君主が多かつたかもしれない。だから君子は「居敬」を大事にして「窮理」を貴ぶのだ。」

(朱子のいう「居敬」と「窮理」については本稿末尾の付録を参照。)

哀公、魯君、名蔣。凡君問、皆稱孔子對曰者、尊君也。錯、捨置也。諸、衆也。程子曰、舉錯得義、則人心服。○謝氏曰、好直而悪枉、天下之至情也。順之則服、逆之則去、必然之理也。然或無道以照之、則以直為枉、以枉為直者多矣、是以君子大居敬而貴窮理也。

## 第二十章

季康子問、使民敬忠以勸、如之何。子曰、臨之以莊則敬、孝慈則忠、舉善而教不能則勸。

季康子はお尋ねした。「民衆を敬意と忠心をもって励むようにさせるには、どうすればいいでしょうか。」孔子は言われた。「端正で厳かな顔つきで民衆に臨めば民衆は敬意を持つようになります。率先して親に対して孝を行い、そしてその親への慈愛の心を民衆に及ぼせば民衆は忠実になります。善を行う者を登用してまだ善を行うことができないう者を教えれば、民衆は善を行うに励むのです。」

集注…

季康子は、魯国の大夫の季孫氏であり、名は肥。「莊」は、容貌が端正で厳かであることを言う。民衆に臨む時は、容貌が端正で厳かであれば人民は尊敬するようになる。親に対して孝を行い、そしてその親への慈愛の心を民衆に及ぼせば、民衆は忠実になる。善を行う者を登用してまだ善を行うことができないう者を教育すれば、民衆は励まされて喜んで善を行うようになる。張敬夫(前出)が言った。「これは皆自身が当然行うべきことであり、民衆を敬意と忠心をもって励むようにさせる為の行為ではない。しかしこのようにできれば、その効果は、思うに、期待しなくてもその通りの結果が現れるのである。」

季康子、魯大夫季孫氏、名肥。莊、謂容貌端嚴也。臨民以莊、則民敬於己。孝於親、慈於衆、則民忠於己。善者舉之而不能者教之、則民有所勸而樂於為善。○張敬夫曰、此皆在我所當為、非為欲使民敬忠以勸而為之也。然能如是、則其應蓋有不期然而然者矣。

## 第二十一章

或謂孔子曰、子奚不為政。子曰、書云孝乎、惟孝友于兄弟、施於有政。是亦為政、奚其為為政。

ある人が孔子にお尋ねした。「先生はどうして政治に携わる仕事をしないのですか。」孔子は答えられた。「『書』には孝についてこう述べている。「孝と友を兄弟に推し広めて、政治を行う。」(つまり、家族全員が孝と友を行えば、即ち「家を斉う」ことであり、政治が家の中で行われていることになる。孝と友は政治の根本だから)、これ(つまり家族全員が孝と友を行うこと)は即ち政治を行うことであり、どうして必ず官職についてはじめて政治を行っているとするのであるのだろうか。」

集注：

定公の初年、孔子は仕えていなかったで、そこで、ある人が、なぜ仕えなかったのかと疑問視したのである。

「書」は『書経』周書・君陳篇のことである。「書云孝乎」とは、『書経』には孝についてこう述べているという意味である。兄弟と仲良くすることを「友」と言う。『書経』では、君陳は、よく親に対して孝を行い、兄弟に対して友を行い、またよくその孝と友の心を家族に推し広めて、一家の政治とした、と言っている。孔子はこれを引用して、このようであれば、これも政治を行うことであり、どうして必ず官職

についてはじめて政治を行っているとするのであるか、と言うのである。思うに、孔子が仕えていなかったことには、その質問者に言いにくいところがあり、そこで、『書経』の語を引用して告げたのであるが、要するに、「至理」(つまり政治の根本となるもの)はまたこれ(つまり孝と友)にほかならない、ということである。

定公初年、孔子不仕、故或人疑其不為政也。

書周書君陳篇、書云孝乎者、言書之言孝如此也。善兄弟曰友、書言君陳能孝於親、友於兄弟、又能推廣此心、以為一家之政。孔子引之、言如此、則是亦為政矣、何必居位乃為為政乎。蓋孔子之不仕、有難以語或人者、故託此以告之、要之至理亦不外是。

## 第二十二章

子曰、人而無信、不知其可也。大車無輓、小車無軌、其何以行之哉。

孔子は言われた。「人として「信」がなければ(つまり、人に誠実な心がなければ、その言うことは全部でたらめであり、今日は東へ行きたいと言いつ、明日は西へ行きたいと言いつのであれば)、その言うことは履行できないはずである。牛車に轅の端の横木(くびき)がなければ、馬車に轅の端の彎曲のくびきがなければ、(牛または馬を車につけることができず)どうやって牛車または馬車を走行させようか。」

集注…

「輓」は、「五」「兮」の反。「軌」は、「月」と発音する。「大車」は、平らかな地面を走行する荷物を運ぶ牛車のことである。「輓」は、轅の端の横木（くびき）で、牛の首にかけて牛を車につけるものである。「小車」は、「田車」（狩猟用の馬車）、「兵車」（戦争用の馬車）、「乗車」（乗用の馬車）のことである。「軌」は、轅の端の彎曲のくびき木で、馬の首にかけて馬を車につけるものである。牛車と馬車にはこの二つのものがなければ、牛車と馬車を走行させることができないのだ。人としてその言うことがためであれば、それもまたこれと同じようなものである。

輓、五兮反。軌、音月。○大車、謂平地任載之車。輓、轅端横木、縛輓以駕牛者。小車、謂田車、兵車、乗車。軌、轅端上曲、鉤衡以駕馬者。車無此二者、則不可以行。人而無信、亦猶是也。

### 第二十三章

子張問、十世可知也。子曰、殷因於夏禮、所損益、可知也。周因於殷禮、所損益、可知也。其或繼周者、雖百世可知也。

子張がお尋ねした。「十世」（つまり、今から先の王朝の名が十回変わった後のその十の王朝のこと）を予知することができるのですか。「孔子は答えられた。「殷は（夏を継いだ後に）夏の礼の根本（つまり、「三

綱」（君臣・父子・夫婦の礼）と「五常」（仁・義・礼・智・信の徳）を受け継ぎ、夏の制度に対して削除と補足を行ったのである（つまり、夏は素朴で忠実であることを尊ぶが、殷は制度の設定を尊ぶ。また夏は旧暦一月を正月としたが、殷は旧暦十二月を正月とした、ということ）。周は（殷を継いだ後に）殷の礼の根本（つまり、「三綱」と「五常」）を受け継ぎ、殷の制度に対して削除と補足を行ったのである（つまり、殷は制度の設定を尊ぶが、周は制度に文章の修飾を加えることを尊ぶ。また殷は旧暦十二月を正月としたが、周は旧暦十一月を正月とした、ということ）。（このように、）その周王朝を継ぐ王朝があれば、百世でも（「三綱」と「五常」）はずっとそのまま受け継がれて行く、ということ）は予知することができるのだ。」

集注…

陸氏（陸徳明、諱は元朗、字は徳明、唐代の儒學者が言った。「十世可知也」の「也」は、「乎」となっているテキストもある。「王者易姓受命」（『史記』曆書「王者易姓受命、必慎始初、改正朔、易服色」。

古代では、帝王は、国家を一家の事業と見て、王朝が変わると、新王朝に新しい名称をつけて前王朝の名称を変えるなどのことを行って、天から「天下を治めなさい」という命令を受けて王位に就いたのだと、民衆に政権の正当性を知らせるのである。つまり、一つの王朝の始めから終わりまでのその期間を「一世」とするのである。子張は「これより先の、十の王朝のことを予知することができるのですか」とお

尋ねしたのである。

馬氏(前出)が言った。「所因」は、三綱と五常のことを言う。「所損益」は、文質と三統のことを言う。「私が思いには、「三綱」は、君は臣の綱(つまり規範)で、父は子の綱で、夫は婦の綱であるということを言う。「五常」は、仁、義、礼、智、信のことを言う。「文質」は、夏は忠(「朴实」、つまり素朴で忠実であること)を尊び、商(つまり殷)は質(「漸有形質制度」、つまり制度が形成されつつあるということ)を尊び、周は文(「就制度上事加文采」、つまり制度のどの項目にも文章の修飾を加えるということ)を尊ぶ、ということを言う。「三統」(「三正」ともいう)は、夏は建寅を正月として(つまり北斗七星の柄が夕刻に寅の方向(東北東)をさす(「建」は「さす」の意)月、つまり旧暦の一月を正月とすること)の人統(「惟人最後方生、当寅位、故以寅為人正」、つまり人は天と地が形成された後に最後に現れて寅の位置に当たるが故に、人正とすること)であり、殷は建丑(つまり旧暦の十二月)を正月としての地統(「其次地始闢、当丑位、故以丑為地正」、つまり天が現れた後に地が現れて丑の位置に当たるが故に、地正とすること)であり、周は建子(つまり旧暦の十一月)を正月としての天統(「天始開、当子位、故以子為天正」、つまり天が最初に現れて子の位置に当たるが故に、天正とすること)である。「三綱」と「五常」は、礼の根本であって、三代(つまり夏、殷、周)は相受け継いで、どの王朝もそのまま受け継いで変えることはできなかつたのである。その変えたのは、制度の内容に対しての部分的

な削除や補足を行ったことに過ぎないものであり、その変更内容は、今でも皆知ることができるといふことだ。ということだ、いまよりこの先の、周朝を継ぐ王朝があれば、(その後の)王朝が百回変わっても、「三綱」と「五常」はずっとそのまま受け継がれて行き、制度に対しては部分的な削除や補足が行われて行く、ということには変わらないので、どうしてただ「十世」だけにとどまるのだろうか。聖人の未来予知はそもそもこのようなことであろうから、後世の「讖緯」(つまり経書に対する神秘的な解釈や予言を書き記した書物)や「術數」(占いで世の中の変化を予測する書物)のようなものではないのだ。胡氏(前出)が言った。「子張の質問は、そもそも未来のことを知りたいということであろうが、孔子はその過去の事例を挙げて「所因」と「所損益」のことを明らかにしたのである。そもそも身を修めることから天下の為(「平天下、謂均平也」、つまり天下の人々が均一に親を親愛し、兄や年長者を敬愛するようにすること)に至るまでは、一日も礼(ここでは、つまり「三綱」と「五常」)がなくてはならない。「天叙」「天秩」(『尚書』虞書・皋陶謨「天叙有典、敕我五典五惇哉。天秩有禮、自我五禮有庸哉」、つまり、天が定めた等級と秩序であって人々が遵守し実行すべき規則)は、人々の共通の拠り所であり、礼の根本である。商(つまり殷)は夏(の礼の根本)を改めることができなかつたし、周も商(の礼の根本)を改めることができなかつた。(礼の根本は)いわゆる「天地の常經」(『漢書』伝第六「祥多者其國安、異眾者其國危、天地之常經、古今之通義也」、つまり天地の固定不変の規則)で



ある。制度や「文為」(「故三代之禮、其實則一、但至周而文為大備」、つまり制度の様々な項目に加えた文章の修飾)の場合は、余計な部分があれば削除すべきで、不足の部分があれば補足すべきであり、削除したり補足したりして、時勢に応じて制度を時代に適したものにして、礼の根本は崩れない。これが古今の「通義」(『漢書』伝第二十六「春秋大一統者、天地之常經、古今之通誼也」、「通誼」は即ち「通義」、つまり普遍的な道理)である。過去の事実に基づいて未来を予知するのであれば、「百世」の遠い未来であっても、このようであるに過ぎないのである。

陸氏曰、也、一作乎。○王者易姓受命為一世。子張問自此以後、十世之事、可前知乎。

馬氏曰、所因、謂三綱五常。所損益、謂文質三統。愚按、三綱、謂君為臣綱、父為子綱、夫為妻綱。五常、謂仁義禮智信。文質、謂夏尚忠、商尚質、周尚文。三統、謂夏正建寅為人統、商正建丑為地統、周正建子為天統。三綱五常、禮之大體、三代相繼、皆因之而不能變。其所損益、不過文章制度小過不及之間、而其已然之迹、今皆可見。則自今以往、或有繼周而王者、雖百世之遠、所因所革、亦不過此、豈但十世而已乎。聖人所以知來者蓋如此、非若後世讖緯術數之學也。○胡氏曰、子張之問、蓋欲知來、而聖人言其既往者以明之也。夫自修身以至於為天下、不可一日而無禮。天叙天秩、人所共由、禮之本也。商不能改乎夏、周不能改乎商、所謂天地之常經也。若乃制度文為、或太過則

當損、或不足則當益、益之損之、與時宜之、而所因者不壞、是古今之通義也。因往推來、雖百世之遠、不過如此而已矣。

## 第二十四章

子曰、非其鬼而祭之、諂也。見義不為、無勇也。

孔子が言われた。「天子は天地を祭り、諸侯は山川を祭り、士大夫は五祀を行い(つまり、家庭で行う五つの祭り。春は戸(入口)、夏は竈(かまど)、秋は門(扉)、冬は井(井戸)、六月は中霤(家の真ん中の室・土地)、庶民はその先祖を祭る(戸または竈を祭ることは許されている)、ということになっている。だから、身分や地位を越えて行すべきでない祭りを行うのは、(鬼神に)媚びることである。為すべきことだと知っていても為さないのは、決断力がないことである。

集注…

「非其鬼(その鬼に非ず)」は、その祭るべき鬼神ではないことを言う。「諂」は、媚びることである。

(為すべきことだと)知っていても為さないのは、「勇」(若見得合做底事、且須勇決行之)、つまり思い切つて決断すること)がないことである。

非其鬼、謂非其所當祭之鬼。諂、求媚也。

知而不為、是無勇也。

付録…

冒頭の「概要」に挙げた諸論文により朱子哲学にいう「氣」「理」「性」「徳」「道」「敬」「君子」の諸語の具体的な内容を、最後に付記する。

「氣」については、「朱子にあっては、恐らく、氣が三種類の存在状態で存在していると考えられていたのであろう。即ち、太極としての氣、陰陽としての氣、五行（質）としての氣、という三つの存在状態である。朱子のいう氣は、実際は陰陽二氣を指すと思われる。形而上的な存在である太極も氣ではあるが、それが形而下的な存在としての陰陽二氣と混同されるのを恐れて朱子は、太極は氣だと言うのを、なるべく避けようとした。また、太極は氣ではあるが、占める空間的な場がなく、直ちに陰陽二氣になっってしまうものだから、無形から有形へと変化するという過程において言えば、太極が先に存在するが、実際の生成順序においては、時間的な先後はない。」

〔朱子の「太極」と「氣」前掲、五七〜八頁〕とあり、「鬼神・神は、理ではなく、氣の作用・働きを意味する概念である。これが鬼神・神の基本義であるが、氣をも意味するのである。しかし、この氣は、凝固しても形質を形成しない極めて清らかな氣であって、凝固して五行（質）を構成する陰陽の氣そのものではない（鬼神は、陰陽の氣と五行の質を意味する場合もある）。」（朱子の「神」前掲、一三六〜七頁）とある。

「理」「性」「徳」については、「理は、人間の意図の如きものが全くない

自然なるもの、本然の性（仁義礼智）または貧富・貴賤・死生・寿夭などといった運命的な規定、行為の準則や事物の扱い方や物の使い方、人間に内在する仁義礼智といった道徳の徳目、事物に内在するそのどうい働きのするかを決めるものとしての機能・能力、事物の働きのあるべき様としての準則、といった内容を有する概念である。これらの内容が集まって一つの体系を構築しているのであるが、その体系の全体をも理と呼ばれるのである。」（朱子の「理」前掲、四二頁）とあり、「仁義礼智信は、「五常の性」、つまり人間に内在する道徳の徳目であると同時に、物の固有属性、つまり事物に内在するそのどうい働きのするかを決めるものとしての機能・能力でもある。「五常の性」と物の固有属性は、いずれも理であるので、「性即理」と言えることは否めないであろう。」（同上）とある。

「道」については、「學而第一」の十四章に「凡言道者、皆謂事物當然之理、人之所共由者也。（だいたい道というものは、すべて、事物の当然の理であり、人々の共通のよるところのものを指すのである。）」とあり、これは即ち、仁義礼智、つまり道徳の徳目及び事物の固有属性としての機能・能力であるが、特に、行為の準則や事物の扱い方や物の使い方を「道」とする、という意味である（朱子の「理」前掲、三九頁）。

「君子」については、「君子」は徳の実行を行う人の呼称である。端的に言えば、つまり、事物の「理」（つまり、人間には誰でも生まれながら仁義礼智の性が備わっているという道理、及び動植物や無生物の固有属性としての能力・機能）を究明し、そしてその「理」に従って言動を行う人のことを「君子」と呼ぶ、ということである。「理」を究明するその過程におい

ては、常に、思慮を集中させるといふ心的状態、及び牽強付会をしないと  
いう心構えを保つ。これが「君子」の特徴である。」（朱子の「君子」前掲、  
一三頁）とある。「常に、思慮を集中させるといふ心的状態、及び牽強付会  
をしないといふ心構えを保つ」ことは即ち、「居敬」「持敬」「主敬」のこと  
である。